



—東地中海・北アフリカ地域ニュース—

イラク・シリア：アル=カーイダとイラクとシャームのイスラーム国の決裂

イラクとシャームのイスラーム国樹立宣言（2013年4月）以来深刻化していたアル=カーイダとその関連組織との相互関係上の混乱・対立が、本格的な分裂の局面に入った。2014年5月2日、アル=カーイダの指導者であるアイマン・ザワーヒリーの演説・インタビューのファイル複数インターネットの掲示板サイトで公式に発表された。これらのファイルの内容のうち、イラクとシャームのイスラーム国についての部分などは既に4月下旬に報道機関などに漏洩して明らかになっていた内容と同一で、ザワーヒリーの主張は「(1) ムジャーヒドゥーン同士の抗争を避ける。(2) 総司令部に諮ることなくイスラーム国の樹立を宣言しない、シリアではアル=カーイダの名称を秘匿する」という方法論に背いたためアル=カーイダ総司令部はイスラーム国と絶縁したというものである。また、シリアでのイスラーム過激派諸派の抗争を「独立のシャリーア委員会」の裁定により解決するよう述べた。さらに、別の演説ファイルでは、書簡も付して「ヌスラ戦線はムジャーヒドゥーン間の殺し合いをやめること、イスラーム国はイラクでの活動に専念すること」を指示した。

こうしたザワーヒリーの発言・指示について、ヌスラ戦線が「イスラーム国が戦闘をやめるならば」自派も戦闘をやめると発表した（5月4日付）。一方、イスラーム国は5月12日に公式報道官の演説を発表し、以下の通り主張した。

* イスラーム国はアル=カーイダとその指導部に親愛の情を表明し、その助言に従ってきた。それ故、イランやアラビア半島で攻撃を行ったり、チュニジア、エジプト、リビアの情勢に関与したりしないできた。

* ザワーヒリーが（ヌスラ戦線の）欠陥のある忠誠表明を受け入れ、シリアでのムスリムの流血を我々のせいにしたことにこそ、騒乱の原因がある。イスラーム国はアル=カーイダの「支部」だったことは一日たりともない。イスラーム国とアル=カーイダとの関係は、指示を出す/従う、という関係ではない。ザワーヒリーには、誤った方法を続けるか、誤りを認めて改めるという二者択一しかない。ザワーヒリーは、以下を實踐して自分自身が原因となった騒乱の火を消すこと。誤りを撤回し、欠陥バイア（=忠誠表明）を却下する。方法論を改め、ラーフイダ（=シーア派）を不信仰と宣告する。エジプト、パキスタン、チュニジア、リビア、リビアの軍とその仲間を、暴君・不信仰・背教と呼ぶ。これら全てに対し、明白にジハードを呼びかける。エジプトをはじめとする暴君との戦いでは、平和主義を捨てて武器を取るようにはっきり呼びかける。

* 現状ではザワーヒリーが呼びかけたような独立の裁定法廷を編成することは不可能であり、エジプト、シャーム、アラビア半島、ホラサーンまでの地域の分裂を解消するカリフを選出し、その下で法廷を設置するしかない。イスラーム国にイラクに引き上げよということは、シャリーア統治が実践されている場所を不信仰者・非イスラーム的統治者に明け渡せということであ

り、イスラーム国の兵士は、1インチでもシャリーアが続べる地から退くことをよしとしない。

この演説は、「再度手を差し伸べる」と称してザワーヒリーに誤りを正すよう要求しているが、ザワーヒリーの指示をはっきりと拒否する内容である。また、イスラーム国のザワーヒリーに対する拒絶は単にシリアやイラクでの活動方針や諸派との抗争の問題にとどまらず、イランやシーア派に対する態度、エジプト、チュニジア、リビア、イエメンでのジハード呼びかけの問題、イランやサウード家に対する攻撃の実施の問題にまで及んでおり、その点でこの演説は「世界的なジハード」の指導者としてのザワーヒリーの鼎の軽重を問うものと解される。今般イスラーム国が表明した態度は、ザワーヒリーがエジプトのムスリム同胞団に同情的な態度を取り続け、エジプトにおける武装闘争を明確に扇動していないことに対する不満や、「アラブの春」以降の各国の政情混乱を、支配地域の確立のようなイスラーム過激派にとっての物理的な成功につなげられていない現状への不満を反映している。また、イラク、シリア、レバノンで実際に戦闘に参加するイスラーム過激派の敵意・関心が専らイランやシーア派に向けられ、本来のイスラーム過激派の関心事項であるはずの西洋諸国に対する敵意・作戦行動が低調になっている現状も、この演説に反映されている。イスラーム国の主張は、イスラーム過激派諸派を取り巻く現状への不満を背景に、一定の共感を呼ぶと思われる。その一方で、イスラーム国が主張するようにチュニジア、リビア、エジプト、アラビア半島でもジハードを扇動することは、イラク・シリアでのイスラーム過激派の活動がこれらの地域からの資源供給によって支えられているという、基本的な現状認識を欠いた誇大妄想的主張である。実際にイスラーム過激派の資源が各地に分散投入されるようになれば、イスラーム国をはじめとするイラク・シリアでのイスラーム過激派の衰退も避けられないだろう。

一方、アル=カーイダのブランドを秘匿してシリアでの活動に専念するというザワーヒリーの方針やヌスラ戦線の活動は、イスラーム過激派にとって本来は否定・解体の対象であるべき西洋列強が作り上げた既存の諸国家の境界を承認するという、アル=カーイダの思想や活動目標の上で認めがたい矛盾をはらんでいる。また、ザワーヒリーやアル=カーイダがイスラーム国からの挑戦に対し自らの威信を示すような作戦行動を行う実力を持つとはいまや考えにくい。イラクやシリアでのイスラーム過激派の活動をめぐる諸派の抗争・論争は、「世界的ジハード」をアル=カーイダが代表し、指揮監督するという従来のイメージを解体する端緒となっている。今後、各地のイスラーム過激派の間の威信・支持の獲得競争が激化したり、地域的な紛争や宗派的嫌悪に没入する団体の勢力が拡大したりするような事態も想定される。イスラーム過激派を観察・分析し、彼らの脅威に備える活動も、新たなイスラーム過激派像の構築の必要性を含む、従来と異なる発想・手法を必要とする局面にある。

(イスラーム過激派モニター班)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799